

IV . 総合討論

座長：足立己幸

登壇者：小泉英明、清野富久江、上原正子、
田代晴子、近藤京子、塚原丘美

和泉（総合司会）：それでは、総合討論の座長は足立所長をお願いしております。よろしくお願いたします。

足立：皆さん、4人の方々の発言はいかがでしたか。途中で休憩時間もなくて、本当にぎっしり詰まった特別講演や発言をいただき、頭の中がいっぱいかと思えます。本日のシンポジウムのテーマ「共食で、あたたかい食育を」の総合討論を始めます。大変幸せなことに、特別講演をして下さった小泉先生も参加して下さいます。小泉先生、発言者の皆さま、どうぞよろしくお願い致します。会場の皆さまもご協力ください。本日は、愛知県内の皆様に加えて全国各地から、バックグラウンドも様々な方々が参加して下さっていますので、会場からの質問を先に頂きたいと思えます。発言して下さる方はマイクのところまでお越しいただき、ご発言ください。本日のテーマは大変広く、深いテーマです。会場からさまざまな発言をいただき、討論し、最終的には「共食であたたかい食育を」について、それぞれが具体的な課題を持ちあって帰りたいと思えます。

では質問などがおありですか？

山本さん：神奈川県立保健福祉大学の教員をしております、山本と申します。管理栄養士の養成課程で、給食に関わる授業等を担当しております。本日はご講演からシンポジウムまで、大変貴重なお話をたくさん頂きどうもありがとうございました。質問は、清野先生にお願いしたいと思えます。お話しの中にもあったことで、第2次食育推進基本計画の中にも書かれていたことですが、やはり共食を実現するた

めに、長時間の労働をしてらっしゃるとか、或いは夜間勤務や変則勤務などしてらっしゃる、或いは一人暮らしの方、といったふうに自分でできないこと、というか出来ない条件の中で、共食を実現していこうと考えた時に、国の基本的なお考えとか或いは具体的な施策とか提案をお持ちなのかを伺いたいと思えました。このことは、学生に対して共食はなぜ大切かということをお話するときに、私自身が答えに窮するところでもありますので、ぜひ伺いたいと思えました。そして、私自身がどうしても共食というと、個人や家庭のサイズで、生活習慣の改善といったところで捉えがちなのですけれども、先生のお話しにもありましたように、ワークライフバランスとか、社会で解決すべき課題が多々あります。このことが、例えば第2次の「健康日本21」の中にも表されている



ような、社会環境の整備といったキーワードでもこれをお話していかねばいけないのかなど、思ったりしています。その整理をどのようにしていったら良いのか、ご助言頂ければありがたいと思えます。よろしくお願いたします。

足立：はい、ありがとうございます。清野さん、いかがで

すか。今、食育推進基本計画の重点課題として“生涯を通した食育”とうたっているけれども、うまく食育の波に乗れていない中高年の人たちや、ライフスタイルが異なり、生活環境が異なる人が多くなっている現実の中で、共食を軸にした食育をどうしたら良いか、国の施策についてもうかがいたい、という質問です。

清野：例えば職場、私も紹介のところでも書きましたけれども、仕事をしながら今4歳の子どもを育てていますけれども、本当にワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の調和）、いかに早く帰るかというのは私の中でも課題で、職場環境というのは非常に重要だというふうに考えています。仕事と生活の調和というのは内閣府の他の部署で行っておりまして、

その労働環境や働き方を改善していくということは、もう政策の中で今やられていることですので、そういったところと内閣府の中でも連携していき、その中で家族と食べる、早く帰って家族と食べるというようなことも重要だということを推進していきたいと考えているところです。そういった観点で食育白書の中にも事例として取上げましたが、労働組合さんの取組ですとか、或いは企業が家族の日ということで、早く帰って家族と食事をしましょうというふうに、取り組んでいるところがありますので、そういった事例を国としても出していきたいと考え、進めているところです。とはいえ、やはり「一緒に食べる」ということだけを考えると、私自身を振り返ってもなかなか、昨日も出張で夜遅くて子どもと一緒に食べていなくて、今日も朝早く一緒に食べていなくてと、考えるとなかなか難しいのですけれども、食育ガイドで示したように、本当に単に「食べる」という行為だけに着目するのではなくて、その前後も含めていかに家族とコミュニケーションを取りながら食を話題にして、何を作ろうか、何を食べようか、そんなことを話題にしていくことから始めるということも、非常に重要なのではないかなというふうに考えております。そういった意図も込めて、食育ガイドの中では幅広い共食ということを捉えたところです。

足立：ありがとうございました。今は家庭で家族との共食をどういうふうに変現していくか、という視点でのお話だったと思います。職場で仲間たちとの共食については、いかがでしょうか。

清野：はい、職場で仲間たちとということ、そうですね、内閣府の食育推進室ということではないのですが、最近メディア等で一番よく出てきているのは、その職場の食堂ですとかカフェテリアですとか、そういったところを使いやすく改善してきているようなところがかなりあるようです。その結果、その仲間、職場の仲間とのコミュニケーションが増えて、アイデアが出てきて新しい企画につながったとか。そういうその職場の中で食べることを大切にしている企業も出てきているということは理解してお

りますので、そういったこともいろいろな場を通じて、発信をしていければなどというふうに考えています。

足立：清水なかまの家は高齢者の方々を中心に共食の場づくりをして、成果を上げていらっしゃいますが、中高年の男性の人びととの活動や計画があったらご紹介いただけますか。

近藤：特に男性というのは、今のところ少ないですね。ただお弁当を届ける役割を担っています。お弁当の配達で男性たちが入ってきて下さっているというのは、大変力強いものがあります。そういう形ではありますが、サロンの方にお見えになる人は少ないですね。

足立：会場の中に、何か良いアイデアか実践経験をお持ちの方がいらっしゃったら、ご紹介頂きたいと思います。

では、次の質問に移りましょう。質問でもコメントでも良いです。はい、どうぞ。

堀さん：名古屋大学の保健学科看護学専攻で教員をしております、堀と申します。本日は貴重なお話をどうもありがとうございました。大変興味深く聞かせて頂きました。

どなたが良いのか不明なので、とりあえず足立先生でお願いしたいです。

私の知り合いで一人暮らしの65歳の男性、田舎に暮らしている方が、遠くの地域で生活している人と一緒にインターネットを使って食事を食べているということです。食事の内容はまったく別なのですけれども、地元の人ですと、変なことを話すと噂になってしまうから、遠くで仲良くなった人とインターネットで画面を見ながら、同じ番組を観て、そして色々なニュースの時事についてお話ししたりとか、そういう興味のあることをやっている。一人で食べているより、やっぱり今そういうことをやっているのがすごく楽しい、とのこと。一日中で、仕事も自営業なので、一日誰とも喋らないということもあるということで、そういうときに、一緒のものでもないし、

一緒のものを食べるわけでもないし、ただ場を共有するという、画面上ですけれど、それだけでも共食として意味があるのかどうか、教えていただけたらなあとお思いまして、質問させていただきました。

足立：新しいタイプの共食の一つの形だと思います。共「食情報の交換」にあたると思います。本日の足立の発言で紹介した全国高齢者の食生態調査で、別居者と電話等で食事の話をする頻度が高い高齢者は日常の食事内容が良好な人が多いという結果がありました。食べる行動、作ったり準備する行動と、そのために必要な能力を育て、情報を交換する行動は食行動の3つの基本行動ですが、これらは連動しています。質問をいただいた男性の場合は、インターネットでの情報交換を楽しみながらの食事、多分その会話の中には食事のことも入ってくるのかもしれませんが。清野参事官補佐が先ほどおっしゃられたように、共食について“できることからやりましょう”という入り方の一つとしても期待されます。

今のインターネットでの情報交換が育ってくると、次の段階で近所のお年寄りとも交換ができるようになる。近所でもインターネットでも良いんですよね、恥ずかしかったら。だんだんそうした輪が広がっていくといいなと思います。新しいタイプの共食の輪になることが期待されます。どうでしょう。

清野：私が、一言。インターネットではないですが、私の場合、義理の母が今一人で奈良の方に住んでいますので、電話で「今日何食べた」というような会話をしています。それも一つの食情報の交換だと思います。それから、必ず送るものはおかずになる

物とかですね。そんな感じで繋がりを持っています。あれは共食に入らない、これは入らないということではなくて、色んなものが繋がっていくと思いますので、インターネットでの情報交換も否定するものではないと考えます。

小泉：今のお話を聞かせていただいて、すごく良いアイデアだなと思いました。今スカイプ (SKYPE) を海外と国際会議をやる時に、相手の顔を見ながら議論できるということで、活用しています。食事のことで頭にはなかったのですが、確かに食事の時にも使えますね。電話とは全然違って、同時に相手の顔も表情も見える、そしたら普通にお話しができるわけですね。

実は震災後仮設住宅の問題について地元は悩んでおられるのですけれども、その解決のヒントになりそうな気がします。そういうような本質が捉えられているものは発展するし、非常に重要です。例えば、母乳の場合とミルクの場合とどちらが良いかという議論がよくあります。大事なのは栄養だけの話ではなくて、その時の赤ちゃんが心はどう通うかというところが、むしろ本質的なんですね。ですから、今よく問題にされているように、母乳であっても携帯をいじりながら授乳をしているケースがあって、それではなんにもならない。でも、哺乳瓶でもですね、赤ちゃんの目を見ながらですね、「目交」（まなかひ）と言いますが、目と目を合わせてコミュニケーションしながら赤ちゃんがミルクを飲むという。それだったら哺乳瓶の方がはるかに良いわけですね。だからやっぱりその、目的が何かということですね、手段ではなくて、目的がうまく達成できる方法、それがすごく大切だと思いますので、今のお話しは大変によいですね。ヒントになりましたし、びっくりしました。ありがとうございました。

足立：他にいかがでしょうか。はい、井形学長、どうぞ。

井形：井形です。今日は色々勉強になりました、ありがとうございました。私は特に高齢者、自分が高齢者ですね、高齢社会であります。今、討論の話題は主に子どもになっていますが、高齢社会においても、



地域とのかかわりが重要になっています。残念なことに、家族関係が希薄になっている。それが、あと10年か20年か経つと独居所帯が4割近くなる。そしたらそれを結びつけるのはね、やっぱり食事でしょう。高齢者の専用住宅とか、寝る場所は別にあるけれども、コミュニティの場が必要でしょう。そこで一緒に食事して一緒にお話しすると、そういう地域社会の再構築が優れた目的に入れられるのですね。

「レイントケア」という施設があります。これも寝るときは別室ですけど、外へ出たら外でコミュニティを再構築する、その中心が食事、そういうことなのです。共食はこれから高齢者にとっても重要な視点だと思いましたので発言しました。

足立：ありがとうございます。共食をめぐる次の機会に、十分に議論ができるとよいと思いました。

小川原さん：名古屋学芸大学管理栄養学部3年の小川原と申します。本日は貴重な講演、大変興味深く聞かせていただきました。ありがとうございます。社会性というか、人間としての社会性を育むために必要な、小さいころに知るべき感情というか、小泉先生のおっしゃる愛着とかそういったものを育むには、共食ってすごく重要だっていうことを、すごく分かりやすく説明していただいて、よく理解できました。

質問は、今の子どもたち、そういった問題を今問題としてできているから、子どもたちには指導できるけど、すでに社会人になった人、そういった感情を育まれずに育った社会人になってしまった人に対するアプローチの仕方はどうしたらよいか、です。そういう人たちもそういう大人たち、学生もそうですけれども。そういった年代に対するアプローチの仕方はどうしたらよいかを知りたいです。管理栄養士としてのアプローチの仕方にアドバイス頂ければと思います。

足立：とても難しい、本日の課題の根幹に関わるような質問が出てきました。まず小泉先生のお立場から、一言お願いします。

小泉：本当に足立先生の指摘のように、とても本質的な問題だと思います。

私も色々赤ちゃんのお話しをさせていただく機会が多いのですが、そういう時に、もう大きくなった、自分たちは大きくなってしまった、自分たちはどうしたら良いのかというご質問がよく出て、つい、もう手遅れですって言ったりするのですが、それではまずいのですね。

申し上げますけれども、やっぱり小さい時はすごく大事なので、それはもちろん大事にしくちゃいけないのです。臨界期ということが言われ、小さい時しかできないと、言われることがあります。これはちょっと過剰な言い方ですね、例えば語学なんかもそうです。例えば、小さいときに英語をしなないと、あとは喋れなくなるとか、いわれます。しかし、例えばお相撲さんの例をあげますと外国のお相撲さんが中学とか高校を卒業してから日本にいらして、それまではまったく日本語をやったこともないのに、日本の生活の中で、日本人と区別がつかないくらい上手な日本語を話す人も少なくありません。小さいときにやってなくても喋れるわけですね。

神経科学的にも勘違いされている部分があって、大きくなったら手遅れだという、断定的なお話しはないのです。大きくなったら確かに学習効率は落ちるというケースはかなりありますけれども、決して遅くはない、もうできないということではないのです。

でも、お年寄り、或いはもう成人した人に対して、どうしたら良いかというのは、確かにご指摘のように研究不足というか、そこのところがよく研究されていないのです。多分赤ちゃんの研究の次は、もっと大きくなった人たちをどうしたら良いのかという研究かもしれません。それで、教育というのはやっぱり長い目で見る必要がありますから、まず、その小さいところからしっかりと育て、社会全体を長い目で変えていくという。これが大事ではないかと現在は考えております。

足立：私が先ほどの発言2で紹介した1回目の調査(1981年)に協力してくれた当時の小学5年生は、今ちょうど41～2歳になっています。子育てでも、

社会的な活動でも最盛期の年代です。自分の子どもたちとどう向き合っているでしょう？ 中には携帯電話優先の食卓で平気な家族になっている人もいるかもしれない・・・。

今全国的に、家族との共食が量的にも質的にもうまくいっていない現実について、当時の子どもたちに申し訳なく、胸が痛む思いです。共食・孤食をめぐる問題点とその構造がかなり明らかになってきましたが、現実の生活の中では改善されていないことについてです。

一方で、子どもたちの共食・孤食についての関心や態度に関する調査で、子どもたち自身の改善への期待が大きいのですが、大人たちがそうでない現実を知り、あきらめの気持ちが広がっていることも確認されています。おとなたちとは家族だけでなく、学校関係者も含まれています。食育が学校でも積極的に進んでいますが、共食・孤食から見るとさまざまな問題点があるようです。言いにくいことですが、学校では子どもだけの問題でなく・・・。

上原：言いにくいこと、というのは足立先生、先生方の問題のことでしょうか。

足立：そうです。あの、自分たちを含めてです。

上原：子どもへの食育や共食についての指導はかなり検討され、実践されてきました。しかし今のご質問のように、大人については難しいと思います。私が指導者の立場として3点くらい、手法はあるのかなと思います。

一つは、大人になるとやっぱり他人の中といいますが、他者の中の自分を気にする人が少なくないようです。だから、他の人々の状況と、その中の“あなたの存在”はという様な話しのすすめ方が、効果的かなと思います。例えば、学校の中でも先生に対し、家庭の様子や他の先生の活動例とかを話すとよいと思います。この時、マイナス面でなく、良い方向で話ができればよいというのが一つです。

二つ目です。大人の方は体験ができます。ある程度色々な体験の場に参加することができるので、自分からその体験っていうのはどうして自分にとって必

要なのかっていうことをきちんと見て体験すると良いよね、ということのアドバイスができれば、見直していただけるきっかけにはなるのかな。

三つ目です。今あげた二つのアドバイスをする人がどういう立場の人かによって影響力は異なると思います。今質問をした人はこれから管理栄養士になられる方ですよ。

学校の中でも専門家、食の専門家は何を考え、どう動くかの影響が大きいと思います。他の専門家や大人への指導の場にも影響してきます。学校全体として、プラスの方向に動いていくのではないかと思います。これは学校の中で仕事をしている一人として、実感として言わせて頂きました。

足立：他国の場合、例えばオーストラリアやアメリカでは、小学校教諭の新任研修のときに、「食育」があります。新任教諭自身の健康管理や食生活管理についてはもちろんですが、学校での食育の教育者としての研修があります。西オーストラリアを例にすると食育キット（食育の概念、発達段階に応じた食育プログラムと評価票、そのために必要な印刷教材や映像教材など）の1セットが全新任教諭に配布



され、演習つきの研修です。すべての小学校の新任教諭がその研修を受けて、配属先の学校に行くのです。

食育を重視する国々は、施策として教育の一環としての食育の質を高めるために、関係者が協力し合っています。日本は残念ながら、そこまで行っていません。国の関係者に外国の実践事例を教材キットもお見せして、教諭の新任研修段階での食育研修実施

を提案したことがあります。が、“重要なことは理解している。しかしもっと優先すべきことが山ずみだ。その解決が優先だ”とのことでした。食育は体そのもの心そのもの、生きることの基礎ですから超最優先課題と思いますが……。

小泉先生に、国への説得の方法を教えてくださいたいと、今日の特別講演で思いました。さて、最後に発言者の方々に一言ずつ、「共食で、あたたかい食育を」という本日のシンポジウムのテーマをめぐって、ご自分がお考えになる一番あたたかいところというのが、あたたかい食育をすすめることができるキーワードというのでしょうか。それをおっしゃって頂きたいです。

塚原：私は今大学で教員をしまして、いつも昼食をゼミ生と一緒に食べます。そこにはもちろん足立先生と一緒にやっている「3・1・2弁当箱法」をベースにした昼食を作って、持ってくるのです。学生の中にはそれを持ってくる学生もいるし、コンビニで買って来た弁当を食べる子もいるのです。みんなそれを食べながら、たぶん私の弁当を見て、自分も作らなきゃいかんかなと思ってたまには作ってきたりして、そこでまたその話もするんですね。

こういうふうな、自分の場合には全員みんな管理栄養士になりたいと思っている仲間たちが揃うわけで、そこでやっぱり私はそれを見ながら、そこで食べごろの話とか、このお弁当箱は先生がこんなこと言ったんだとか、そういうふうな話をする一番良い場所であるように思います。共食というか一番楽しい、私も楽しいですし、学生もそのお昼ごはん、みんなと一緒に食べるのが、楽しみにして食べてくれていると思います。テーブルが狭くて大勢のゼミ生がきゅうきゅう詰めで食べるんですね。テーブルが狭くて、お弁当を重ねながら食べているのですが、でもそれがやっぱりみんな良い、楽しい場

所だし、そこにはみんな時間を合わせて、自分のスケジュールを合わせて来ますし、まあそこが一番大切なところですよ。こうしたあたたかさを持って卒業していてももらいたいなと私は思っています。

足立：そうすると塚原研究室のランチは、教員と学生という関係よりも、同じ生活者同志というか、そういう立場でのあたたかい食育にもなっているんでしょう。

近藤：今はもう二人の子どもたちが40代と30代後半で、大きくなりましたけれども、子どもを育てているときに、うちの家では、“7時に会いましょう”、“夕方の7時、夜の7時、7時に会いましょう”というのがキーワードでした。

それは、夫がどんなに忙しくても、私がどんなに忙しくても、子どもも部活でも、塾はいかないけれども、とにかく7時になったらみんな揃って夕飯を食べるっていうことでした。これはもうずっと子どもたちが卒業する、大きくなるまで、家を出るまで、続けてきたことです。それで、一緒に食べている力というのは、少々子どもがあちこちちょっと歪んだりしたけれども、戻ってきます。だから、それはもう手ごたえがあるなあというのが、私の一緒に食べるということへの、いまだに持っている思いです。

田代：私は、子どもの立場からの発言をします。自分の父親がすごく無口で、優しい言葉とかあまりかけてくれるような人ではなかったのです。でも、父親が作ってくれる私のラーメンには、いつも私だけに好きな落とし卵が入っていました。一人暮らしするようになって、母親から送ってくれる仕送りの荷物には、私の好きな食べ物とかチョコレートの銘柄とか、全部すごく分かってくれています。今は、離れて暮らしているから食べることはできないけれど、でも小さい時から一緒に食べている、そういう思い



出が今の私を支えてくれています。だから今働いているお店で、ちょっと子どもにイライラしているママとか、ちょっと食事をあんまり大切にしていないなどという場面を見ると、“すごく食事で子どもは支えられることがあるから、大切にして欲しい”を伝えられたら良いなあって思っています。



上原：私からは、先ほどの話にちょっと付け加えます。小中学校は義務教育です。今、質問にありましたように、大人の人びとに食べることが大事、一緒に食べるということがやっぱり大事だということを教えるようにすると、なかなか機会はなくなります。

だから、小学校、中学校の時に、給食指導で共食という今日の視点について、もう少し深く、どうしたら共食が子どもたちの心に残るのか、共食はどうしたら良いだろうかっていうことを、指導して頂きたいなあと思っています。

清野：そうですね、一児の母として、また、今内閣府というところで食育を担当している者として、やはり最後に一言は“できることから始めよう”ということです。お互いを認め合い、そしてできないところを伸ばしていくのはなかなか難しいですので、できるところから始めて、自信を持って、次に全体が伸びていくような、そんな取組があたたかい食育に繋がっていくのではないかと考えています。

小泉：今日のお話を伺っていて感じたのですが、あたたかい食育はあたたかい心を育むと、その可能性がとても強いというふうに感じました。先生方の実際のご経験を伺っておりましてそれを感じました。

このあたたかい心っていうのが、これからすごく大事な時代になってくると思うのですね。仏教の方なのですが、海外からいらっしゃった方で、ちょっと政治的な背景が色々絡むのでお名前は申し上げられないのですが、脳科学に大変興味を持たれてですね、自分のホテルに一度ちょっと来なさいということで誘って頂いて、仏教のお話を一時間ほど議論させて頂いたことがあります。

そのときに私にはどうしても伺いたいことがあって、倫理とは何ですかということをお伺いたくて、不躰にそういうご質問を最後にいたしました。そうしましたら、その仏教の指導者の方はしばらくじっと考えておられてですね、どうも初めてそういう質問を受けたみたいで、それでおっしゃった言葉が、Warmheartedness というふうに言われたのですね。or Compassion と言われました。倫理っていうのは、あたたかい心だと。私はその言葉は、素晴らしい言葉だと今でも感じています。そのあたたかい心、それを育む可能性に、今回の食育というのは、大切な役割があるのではないかと。

さらに、現代の世の中で、いわゆる Compliance とすることが盛んに言われます。法を守る、遵守。コンプライアンスと倫理、これははっきり違っています。倫理はやはりあたたかい心なのです。法を守る、そういうだけのことじゃないわけです。

だからこれから大事なのはあたたかい心。それを今回は学ばせて頂きました。

特に私、今回大変感動させて頂いたのですが、作ってあげたいごはんコンテスト、素晴らしかったですね。あれは是非実行したいと思って、明日は日曜日ですので、さっそく私のイメージでオムレツを一つ作ってですね、それにケチャップで文字かあるいは絵を描いて、家内に温かいうちに食べさせたいなと思いました。

足立：皆様、それぞれにすばらしい、貴重なメッセージをありがとうございました。

小泉先生のオムレツで告白(?)も聞いてしまいました。ありがとうございました。

さて、本日のテーマ「共食であたたかい食育を」について、あたたかい気持ちがとっても大事だとい

うことが共有されたように思います。難しいのは、その“あたたかい気持ちをどう伝え合っていくか”ということ。これが課題になると思います。

繰り返しになりますが、食行動（食事を食べる行動、食事を作って準備する行動、食情報を受発信し、食生活を営む力を形成する行動）は多様な行動から成り立っています。しかも、すべての人々が関わり、地域やライフスタイルやさまざまな条件の影響を受ける中で多様な営みなので、その人にとって自己表現・自己実現の可能性が高い特徴があるといわれています。

だから、食事の場はあたたかい気持ちを伝えるチャンスが多い。それを受け止めて、ありがとうと言うチャンスも多い。逆にそうじゃないと感じる、自分がどうすべきかと葛藤する、こうしたプロセスを相手が受け止めて悩みを共有するチャンスも多い。共食はこうした人間のあたたかさも、そうでない気持ちや関係を共有できる、身近な場といえましょう。

折角そうした可能性を持っている場なのに、携帯電話優先で食事が終わってしまうような状態を作らないことも、すぐできることのひとつかもしれません。

本日のキーワードである“共食で、あたたかい食育を”がそれぞれの家庭や学校や職場や地域で成り立って、あたたかい食育、あたたかい生き方、あたたかい国際社会（少し大げさですが）などがうまく繋がっていくことを願います。

それぞれの立場で、できることからやってみる。病気で寝ている人も、障がいのある人も、それぞれがそれぞれの立場で、そういう自己表現・自己実現の可能な場としての食事・食生活・食をもっと大事にしていきたいと、強く思いました。

果てしなく続く、とても大きなテーマですが、今日は皆それぞれがこのテーマを巡って考える場を共有できたと思います。この点で本日のシンポジウムが一つの役割を果たさせて頂けたように思います。今日の特別講義をして下さった小泉先生はじめ、それぞれ個性的な発言をして下さったシンポジストの方々に、もう一度大きな拍手でお礼を申し上げて、この会を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。会場の皆様、どうもありがとうございました。



いました。

和泉（総合司会）：足立先生、どうもありがとうございました。先生方どうもありがとうございました。これを持ちまして、本日予定しておりましたプログラムを終了させていただきます。

それでは、忘れものないように、お帰り頂きたいと思います。本日はどうもありがとうございました。